

景観フォーラム

日本景観フォーラム会報 3号 (2011年10月1日)



巻頭言

新たな時代の始まり

東日本大震災から半年になりますが、復興の速度は遅々として進まず、隔靴搔痒の感が否めません。復興のためには、インフラ整備が先ず最優先しなければなりません、そのインフラ整備に迷いがあるから復興が進まないのではないのでしょうか。

先ず提案したいのは、コンパクト/スマートシティ構想CSC(Compact Smart City)です。2~3キロ圏内に生活必需関連の公共建造物があり、地産地消される食糧とエネルギーが供給されるような、足で歩けるコンパクトで無駄のないスマートな人口1万人ぐらいのまちづくりを創

造するということです。

特にエネルギーですが、ご存知のように日本は自然エネルギーの宝庫ですので、小水力発電・地熱・海洋エネルギー、そして森林を利用したバイオマス等々が限りなく手の届くところにある大変豊かな国であるということに、もう一度目覚めるべきかと思えます。そして、このCSC構想は食糧とエネルギーを自ら創り出すという試みですので雇用もしっかりと確保できますし、そこには当然豊かな景観とコミュニティが創造されることでしょう。

3月11日以降、私達はどのくらいそれ以前の常識に挑戦できるでしょうか。そこには、新たな時代の始まりが待っていることは間違いありません。(斉藤全彦)

予定

◇定例研究会◇

●10月12日(水)18:30~20:30

テーマ:エネルギーと景観

講師:古屋 将太

(環境エネルギー政策研究所)

会場:JICA地球広場

●11月9日(水)18:30~20:30

テーマ:照明と景観

講師:野村宏幸

(照明コンサルタント)

会場:JICA地球広場

◇忘年会+箱根視察◇

●12月16日(金)(1泊2日)

場所:箱根太陽荘ほか

(写真=アテネ市内)

これまでのいろいろ

家はもう一つの街

豊村 泰彦

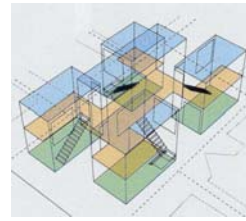
今年の5月の定例会は建築家の会田友朗さんに講師をお願いし「住宅と景観」というテーマで話していただきました。会田さんにはご自身の建築作品の中からいくつかとりあげて設計コンセプトや建物の構造特性などを解説していただいたのですが、中でも白壁を基調に光を様々な角度から取り入れる建物の構造は、日本の住宅と云うより、地中海風というか、非日常的というか、そんなイメージも感じました。特に気に入ったのは、家に居ながら、街の中にいるような感覚が味わえる2011年に世田谷に建てたという「S House」(写真参照)で、この家に住むと毎日クリエイティブになってしまうでしょうね。家の真ん中が広場のようなフリーなスペースになっていて、そこで家族同士が顔を合わせるとちょっとお隣さん同士のような適度な距離を感じて、いつまでも新鮮な感覚でいられるかもしれません。これこそ西欧建築の基本なのかしらんと思ってしまう。

◆なぜ住まいは西洋式なのか

どうも日本は、昭和期以降、一戸建てという畳と洋間が混合した文化住宅志向に固まり、それが日本人のライフスタイルであるかのように思われていますが、今のマンションでも住宅でもなんでわざわざ住み難い居住様式をあえて選んで暮らしているのだろうと思ってしまう。

人間が住む空間というのは、共有部分と個の部分から成り立っています。それは都会だろうが田舎だろうが街だろうが自分の家だろうが同じ。その思想が徹底しているのが西洋です。ところが昔から日本人はちょっと違います。個というのは身体だけなので、空間はほとんどが公の空間、たとえば長屋というアパートも基本的には隔てがない。だから食べるものも日用品もほとんど共有でやっていました。

ようするに日本人の本来のあり方からすると、隔てのないオール・フリースペースの方が適しているんだと思います。しかし、文明開花以来西欧建築をどんどん取り入れ、公共住宅では飽き足らず一般住宅にも和洋折衷スタイルをつくり、中流世帯の文化住宅や低所得者向けの公団住宅も造りまくりました。それでなんとなく、「今日の日本(にっぽん)」と云うのができあがってしまいました。それが顕著に現れているの



〈写真3点〉
アイダアトリエの
パンフレットより

が我が国の景観です。

本音を云えば生活しにくいんだけど、「欧米を見習え」「経済大国を目指せ」と云って慣らされてきませんか? もっとも、都心まで長時間かけて通勤するベッドタウンの拡大とともにこのライフスタイルは日本人に定着していきました。しかし、退職したあとのことは考えられていません。そして都市にどんどん近代建築によるマンションが建ち上がっていきますが、日本のマンションは伝統文化の名残か文化住宅志向の惰性が各世帯には必ずベランダやテラスが設けられ、そこには布団や洗濯物が陽光と微風を受けて揺曳しています。

◆まず街を見るとか

その景色を何とも思わなければ、国の住宅政策に乗って、身も体も改造日本人でしょう。「でも、それっておかしくない?」とか、「そういえば外国って住宅地でも都会でも街並みすっきりして綺麗だよ」と少しくリアになってきて、もう大半が「日本の街の景観ってよくないよね」ということになっています。ようするに、西洋的な物と日本的な物はやはりどこまで行っても別物であって、町としても個人の住宅としても、その根本的なことを自覚しないと、結局、自分の生きる意味も目的も漠然としてしまいます。そしてますます街には蜘蛛の巣が張ったように電線が張り巡らされ、雑然、渾然、曖昧模糊、です。それが日本、そして日本人の心の状態ではないですか。でもそれでは日本の未来に希望はありません。だからもっと目を凝らして、クリアに街を見なければいけないと思うんです。家で自分の部屋に閉じこもろうと、やはり自分は常に街の中に居るのですから。つまり自分の家の中も街の一部なのですから。というわけで会田さんの建築に「家はもう一つの街」と云うコンセプトを感じたわけです。

活動記録

7月2日、フォーラムが応援している「吾野宿再生と吾野を語る会」主催の「高麗川ホテル鑑賞の集い」(飯能市吾野)に参加しました。(フォーラム関係者6人)



被災地支援体験レポート～宮城県三陸町

筆者は、2011年4月下旬（NGOに合流し1週間ほど宮城県石巻市へ）および5月中旬（実働2日ほど、栃木県日光市の有志団体に合流し宮城県南三陸町歌津地区へ）の2度ほど、被災地支援をする活動に加わった。

■被災地へ～ 思いと行動を向けて

未曾有の大災害と言われる中、機会を作れば是非現地で何かしら役に立ちたい（幼少時に仙台で過ごした記憶も背中を押したかもしれない）、また、北関東以北とは比較にならないものの、東京も影響を受けた中、個人的には初めて感じた地震の恐怖からの「ジブンゴト化」「明日は我が身」との思い（物理学者で作家の寺田寅彦の随筆「災難雑考」には地震研究者の視点から、「日本の国土全体が一つのつり橋の上にかかっているようなもの」という表現もある）、様々なものが去来しての判断だった。



■被災地とその景観の今後を巡らす

今回の災害で大きく破壊されてしまったまちなみの再形成を景観という軸を照らして考えてみる。正直、語るにはあまりに短い体験の中からである印象を自分の中でも拭えないが、しかしその中でも1ヶ所ではなく、2地域の姿を目に収めてきたことで考えさせられることもあった。

1つは「被災地の復興」と一括りで語られるが、よくよく考えてみれば当然であるが地理的条件なども異なり、再興へ向けた取組みは広域で共通で検討できるものと各地域それぞれで検討されるべきものを分けて考える必要がある、ということである。（石巻市は人口16万人強。この規模の人口を支えていることから推察できるが平野部が大きい。一方、南三陸町はリアス式海岸の特性を強く受け平野部は狭く、海岸に近いエリアは津波の力を大きく受け徹底的に破壊されていた。）

もう1つは基本的に、まちなみ形成プロセスに常時も非常時もないのではないかと、ということ。（結局はそこに生活する人々すべてにとっての快適とは何かを突き詰めるプロセスであり、適用されるべき方法論は同じ）これら、根源的で当たり前の事実をはっきりと認識した気がしている。

■より大局的に - この国のカタチ

1995年 阪神淡路大震災 - 「ボランティア元年」と言われた。一つ、特に日本の市民活動に取って大きな節目となった、と言えると思う。そして2011年。東日本大震災以降の日本。エネルギー政策、あまりに空しく空転・迷走する政治状況、超円高や膨れ上がる財政赤字などの経済的な試練、乗り越えるべき節は一つどころではない。しかし、犠牲はあまりに大きかったが、その犠牲をしかと受け止め、エネルギー政策、景観形成、居住地区の再興等、危機的な財政と将来負担増大の問題、などやはり市民がしっかり声を上げ、そして行動せねばならない、と思う。

当然ながら日本に暮らす市民の一人として、具体的な行動を進めることを自分自身にも期す次第。正に総力戦である、と捉えている。



レポーター 角田善彦

都市美研究～ポートランド(アメリカ)

米国西海岸の中心的都市ポートランド（オレゴン州）は、自然と近代建築が調和した洗練された都市美を誇る街として知られる。人口58万人とかなりの大都市なのだが、車で溢れかえる日本の同程度の都市と違い、驚くほど静かだという。それは、公共交通機関の発達により自動車が少なく、歩行者や自転車優先のしくみがインフラ的にも市民のマナーにおいても浸透しているからである。

横断歩道あるないに関わらず人や自転車が横断しようとしていると車は必ず止まるというのだ。また、ここは住民自治が発達していて、市民による委員会組織が身近な問題について議論し決定する機構がしっかりと整備されている。やはり公共秩序を上から権力で押さえつける社会では街は綺麗になっていかないのだろう。

ウィラメット川を臨む→



ブックレビュー

『都市から見る世界史』

J・コトキン著
庭田よう子訳

ランダムハウス講談社
2007年刊



今回の東日本大震災では多くの都市が津波にのまれ、記憶に残らないぐらいの壊滅的状况を呈した。都市とは人々が生きてきたその生活の証であり臭いである。それをまったく灰燼に帰してしまうのが自然の力というものであろうか。しかし、人類が生息している限り都市は人類の歴史そのものとして現れる。フランス人神学者ジャック・エリュールが言ったように「自然の恩寵を失った人間が、その後新たに実現可能な秩序を創造しようとした試みが都市である」ということであろうか。

都市はその誕生当初から重要な三つの役割を担ってきたと著者はいう。即ち、神聖な場の創造、基本的安全の供給、商業取引の場である。そして、彼の都市研究によれば、「豊かな都市であっても道徳的な絆や市民としてのアイデンティティが欠ければ、退廃的になり衰退する運命が待っている」という。

確かに、都市とはそこに住む市民が共通のアイデンティティで結び付いてこそ生きた都市である。人類の長い都市の歴史を振り返り、「都市は大衆の複雑な性質をまとめ、活気を与える役割を果たす神聖な場所を支配することによってのみ栄えることができる」との著者の結論には、まさに現代人が失ってしまった「場の神聖性」を呼びかけているのである。(齊藤全彦)

VOICE

景観に防災の観点も

山崎晃弘 (建築家)



「まちづくり」とは何をさすのか。その定義はないにしろ、大方は「町並みの整備」や「活性化推進の町興し」を想像するだろう。それが行政主体か住民主体かを問わず、どちらも当てはまっている。

例えば、まちづくりセンターなる組織は行政主体のみならず住民協働のものもあって、主に市街地の活性化推進を目的とした。

だが、2004年に景観法が制定され、オマケ的価値だった景観に重心を移さざるを得なくなった。なかには、景観法92条にある景観整備機構の指定を受けたものもあるが、まだまだ景観への取組みは希薄な感がある。一方、国土交通省後援のエリアマネジメントなる活動は一部地域に限定され、しかも住民管理だから行政とは疎遠だ。

そこで登場するのが、わがNPOではないだろうか。地域の経済高揚の支援として、行政参加の主導をなし、景観をインターフェイスとした「まちづくり」を行なう、貴重なコーディネーターとなりえる存在だ。だからこそ、これからの活動には期待ができる。

ただ、勉強会における景観の方向性が試行錯誤のなか、今後の課題として、その行き先を明確にしていくことはもちろんだが、そのなかに防災を含めることは必要である。

東北に行って気づいたこと

会田友朗 (建築家)



7月、東北地方へ4泊の出張へ出かけた。前半は、米国に本拠を置くNGOの日本における設計フェローとして、東日本大震災の復興プロジェクトに関連した調査。津波で大きな被害を受けた牡鹿半島の漁村と、気仙沼近郊の町と役所を訪れた。

後半は、別の仕事で、仙台から高速バスで庄内地方の古い温泉街へ。ここでは、家具製作の一日ワークショップの講師を担当させて頂いた。仙台平野で、まだ逆さまの車や船、家屋の部分が散在する田畑の光景を目の当たりにした後に、庄内平野の手入れのゆきとどいた、一面に緑のまぶしい田園風景を前にして、しばし言葉を失う。しかし、直に表向きとの対照とは逆に、そこにある問題が根底ではそれほど変わらないことに気づく。震災以前から地方では高齢化と過疎化による経済の衰退が明らかだった。その意味で、山形の温泉街とてかかえる問題は同じなのである。黙っていても、かつて華やかになりし温泉街もさびれていく一方だ。そこで、地域の特産品や新商品をアピールするための朝市が企画され、僕は、やる気のある若い旦那衆とともに、朝市のための展示台を話し合っ設計し、皆で協力して製作、完成までこぎつけた。

こうした細かなことの積み上げが長い目でみて地域の将来につながっていくことは、被災地でも被災地でなくても同じことと思う。日々の住宅の新築や改修の設計とはまた別に、こうした活動に参加して、微力ながらその一助となれればと願っている。

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム
〒152-0011 東京都目黒区原町2-8-14-301
TEL 03-6802-7331 FAX 03-3793-9192
E-mail info@keikan-forum.com
URL: http://keikan-forum.com/